

# 2008 residential design competition 住宅設計コンペ theme「環境」

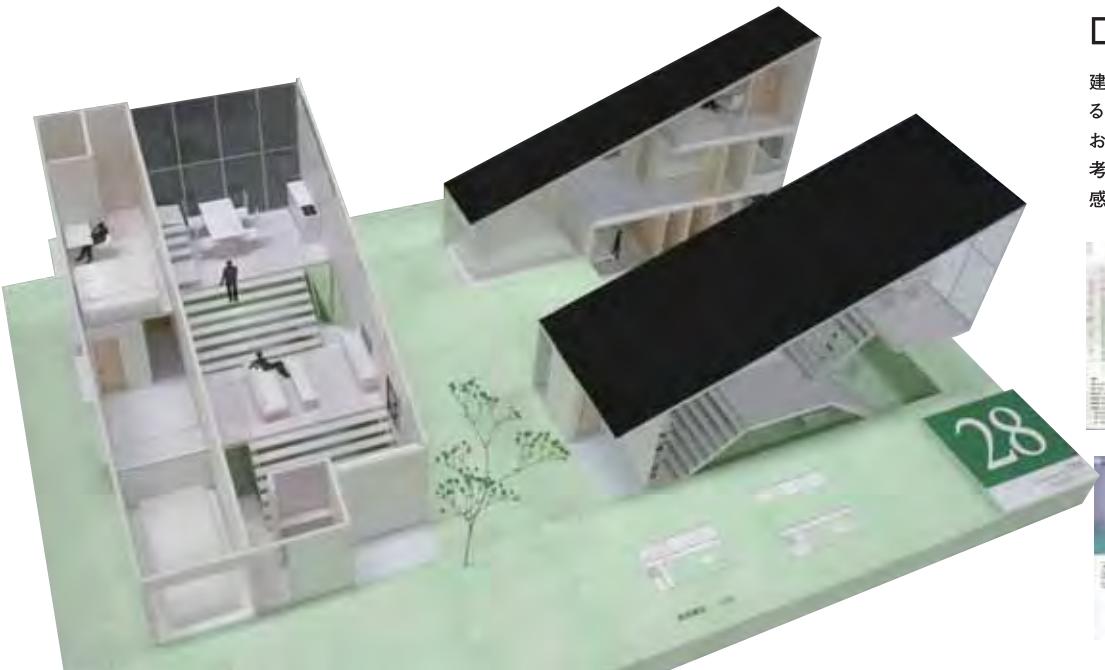
*The highest award*

## 最優秀賞 塚田 浩介

広島大学 大学院 工学研究科 社会環境システム

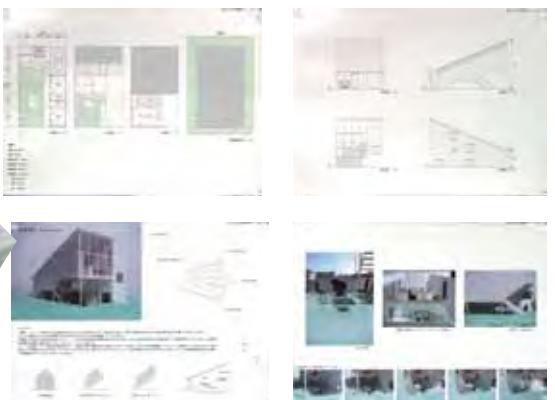


## 「した庭の家」



### Concept

建物全体での省エネルギーとして、風や光などの自然エネルギーの利用を考慮して計画している。この「した庭の家」では、日本の夏に吹く恒常風を住宅内部に取り入れ、風の通り道が出来る様に平面・断面構成が計画されている。高温多湿な日本の夏において、住宅内部の通風を確保することは、暑さや湿気の対策として非常に有効であり、過ごしやすい居住環境が得られるのではないかと考える。また、「した庭」という大きな庭のような空間は、「夏期におけるリビングやダイニング」のような場として想定している。「季節の変化によって住まいの中心を移しながら生活していく」という方法は、快適な居住環境が得られるだけでなく、環境配慮・省エネルギーといった点からも有効だと考える。さらに、この「した庭」に積極的に緑を取り入れることで、夏には余分な日差しを遮り、冬には落葉し日差しを取り入れることが可能になる。住まいの中に緑を取り入れることは、見た目の美しさだけでなく、一年を通じて四季を感じられるなど生活に潤いを与えてくれるものだと考える。



建築とエコロジーの考え方として、自然のエネルギーを有効に活用することが大切だと考える。現在の一般的な住宅では、室内の環境を快適に保つ方法として、冷房や暖房などの機械設備の使用が前提となっており、建物の断熱性能、気密性能を向上させることに重点が置かれている様に感じられる。

それでは暖房や冷房といった機械設備に依存したものになってしまふだけでなく、内部と外部のつながりが希薄で、閉鎖的になってしまう。快適な居住環境を得るための方法としては、はじめから全て機械設備に任せてしまうではなく、可能な限り光や風などの自然のエネルギーを利用し、建築的な工夫をした上で、足りない部分を機械設備で補うといった考えが大切だと考える。

この「した庭の家」では、自然エネルギーの利用として、一つに風の通り道を考慮しながら計画している。夏の恒常風を住宅内部に取り入れる様に、平面・断面的に考慮している。高温多湿な日本の夏において、住宅内部の通風を確保することは、暑さや湿気の対策として非常に有効であり、過ごしやすい生活環境が得られると考える。日本のような亜熱帯の国では、夏のある時期はかなり暑いが、通風がしっかり採れている風通しのいい家であれば、日本の夏でもかなり過ごしやすくなり、高温多湿の「多湿」の部分がかなりカバーされるのではないかと考える。

*cooperator prize*

## 協賛者賞 藤後 亮平・橋本 昂子

明治大学 大学院 理工学研究科 建築学



## 「囲い庵」 ～環境の変化を楽しむ住宅～



### Concept

「環境」という課題に対して、あらゆる環境の変化を受け入れ、様々な環境の変化を楽しみながら暮らすことの出来る住宅を提案しました。

建築という側面から環境を考える時、建築材料やエネルギーなど、地球環境に直接的に影響する側面の他にも「環境」という言葉の意味は幅広く、様々なことに波及していきます。そこで、下記の3つに注目しました。

- 1.自然環境
  - 2.家族環境
  - 3.周辺環境
- 建築を設計する上で、材料やエネルギーといった自然環境(=地球環境)に直接的に影響するものだけでなく、家族環境や周辺環境といった“日常生活の変化”に着目することで、環境の変化をポジティブに捉え、日々の生活を楽しみながら、間接的にも地球環境に貢献できる住まいを提案したいと考えました。



「囲い庵」ではこれらの3つの環境の変化に対応すべく、住宅の空間構成を「入れ子構造」とし、住戸内部に「緩衝空間」を設けました。この緩衝空間は、住人の意志によって多様な機能(役割)に変化し、冬季には、冬の寒さから身を守る断熱空間としても機能します。生活空間に「層」をつくることで、様々な環境の変化に対して住人が柔軟に対応できるような幅を与えました。

さらに、隣り合った空間同士の境界面、住戸と外部の境界面に「引き戸」を用いることで、距離を縮めたり、距離をおいたり出来るような構成になっています。

日常生活に欠かすことのできない住宅において、様々な環境の変化に対して住人が柔軟に対応できるような幅を与えることで、建て替えや住み替えなどをすることなく、長い間その住宅に住み続けることが出来ます。

持続可能な住宅は、長期的に地球環境に優しい住宅であると考えています。

# 2008 住宅設計コンペ residential design competition theme「環境」優秀賞

Japan Architectural Consortium of Students



山田 明子・斎藤 啓佑・菅谷 祐輔

東京工業大学 建築学

## 「大きな屋根の小さな家」

### Concept

「大きな屋根の小さな家」では、タイトル通り、環境負荷の低減と豊かな空間を調停するものとして、片流れの大屋根をもつ住宅を考えました。この大きな屋根は、夏には暑い空気を外部へ逃がし室内へ涼しい空気を供給し、冬には暖かい空気を家の中へ送り込みます。屋根により空気の流れをコントロールするという自然環境に考慮したバシップでクリーンな空調デザインです。また、この大屋根により内部空間には一層から三層までストレッチする伸びやかな空間を作り出しました。主室、ガレージ、フリースペース、各個室、ロフトはそれぞれ分節することも、立体的に連続させることもできます。これにより、例えば一人で落ち着ける小さな空間をつくり出したり、フリースペースと個室、主室とガレージを連続させて広い大きな空間として利用するなどといったように、その時々の状況や、家族の成長にあわせてフレキシブルに対応できる空間構成となっています。



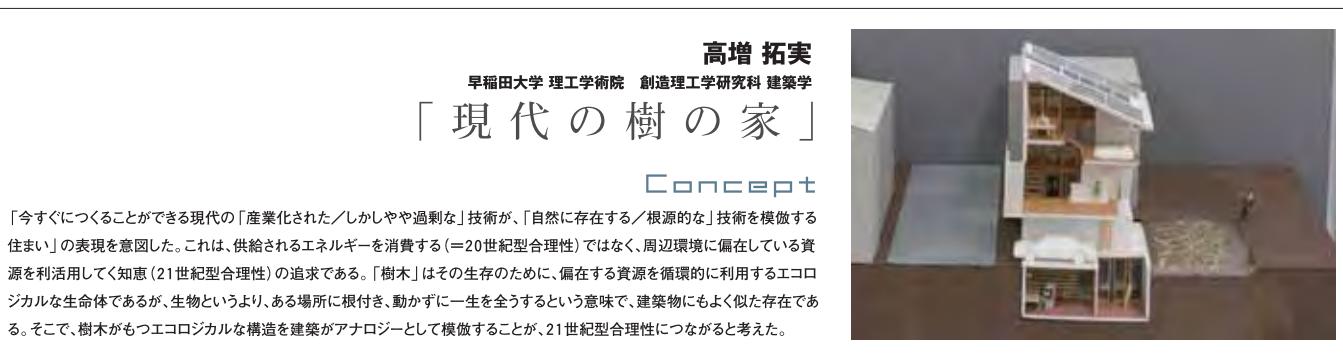
逸見 豪・菊地 智大

東京大学 大学院 工学系研究科 建築学

## 「大地のたかくなるところ」

### Concept

敷地の南西にどこまでも広がる大地。この圧倒的な水平面はこの場所の最も大きな特徴です。しかし、ここには、人が何をしていてもゆるせるような大らかさが感じられるとともに、茫漠としてしまう使うための手がかりがないようにも思いました。そこで、どこまでも広がる大地を切り取って、高くすることにしました。まるで、草原にある丘や山に自然と上りたくなり、人が集まってしまうように、この「大地の高くなるところ」が自然と家族の居場所になるのではないかでしょうか。



高増 拓実  
早稲田大学 理工学部院 創造理工学研究科 建築学

## 「現代の樹の家」

### Concept

「今すぐにつくことができる現代の「产业化された／しかしながら過剰な」技術が、「自然に存在する／根源的な」技術を模倣する住まい」の表現を意図した。これは、供給されるエネルギーを消費する(=20世紀型合理性)ではなく、周辺環境に偏在している資源を利活用してく知恵(21世紀型合理性)の追求である。「樹木」はその生存のために、偏在する資源を循環的に利用するエコロジカルな生命体であるが、生物というより、ある場所に根付き、動かす一生を全うするという意味で、建築物にもよく似た存在である。そこで、樹木がもつエコロジカルな構造を建築がアナロジーとして模倣することが、21世紀型合理性につながると考えた。

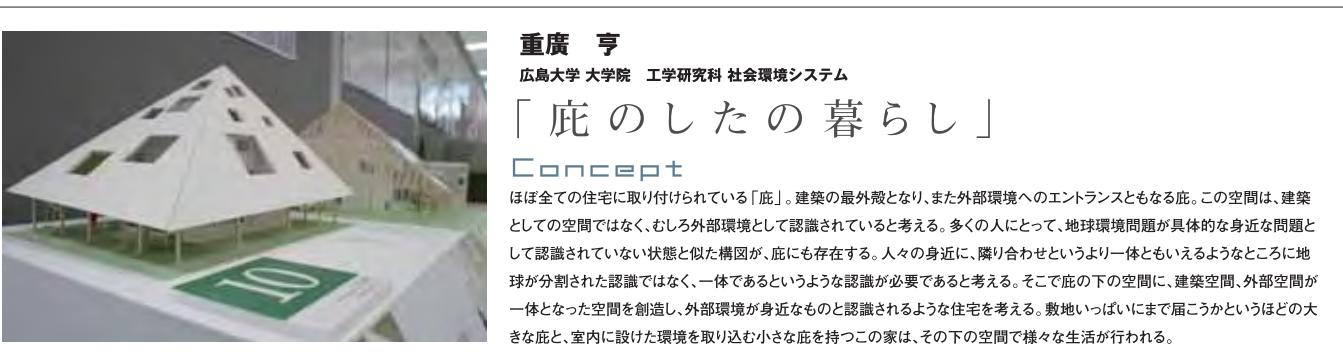


森 孝行  
早稲田大学芸術学校 建築設計科

## 「(無題)」

### Concept

この住宅は環境、特に緑化について、2つ提案しています。1つは、グリーンカーテンです。東面の大きな開口の前に、落葉のつる性植物を植えてそれがカーテン状に広がることで、ある程度の光と視線を遮るというものです。2つめは、グリーンシェーリングです。敷地の建物が建ったあと、残された余白部分をお互いにシェアリングすることでセミパブリックな空間が生まれます。このような、環境に対して投げかける要素を持っていますことで、自己完結して閉じた住宅となることを避けることが出来ると思います。1軒の住宅が連鎖を呼び、影響が広がることでその「広がり」が環境をつくっていく…。その住宅は地域にとって大切な存在となっていく、そのような住宅であって欲しいと考えています。



重廣 亨  
広島大学 大学院 工学研究科 社会環境システム

## 「庇のしたの暮らし」

### Concept

ほぼ全ての住宅に取り付けられている「庇」、建築の最外殻となり、また外部環境へのエントランスともなる庇。この空間は、建築としての空間ではなく、むしろ外部環境として認識されていると考える。多くの人にとって、地球環境問題が具体的な身近な問題として認識されていない状態と似た構図が、庇にも存在する。人々の身近に、隣り合わせというより一体ともいえるようなところに地球が分割された認識ではなく、一体であるというような認識が必要であると考える。そこで庇の下の空間に、建築空間、外部空間が一体となった空間を創造し、外部環境が身近なものと認識されるような住宅を考える。敷地いっぱいにまで届こうかというほどの大きな庇と、室内に設けた環境を取り込む小さな庇を持つこの家は、その下の空間で様々な生活が行われる。



宇津 奏子  
日本女子大学 大学院 家政学研究科 住居学

## 「都市個室間領域」

### Concept

一軒の住宅の中で、都市という最もパブリックなスペースから個室という最もプライベートなスペースまでの「都市個室間領域」の空間配置とアクセシビリティによって、居住者である4人の家族がこれから経験していくお互いの関係の成長と変化、また家族以外の人間と作っていく新たな関係に適応できる住宅である。道路からアクセスし奥に行くに連れて基本的にはプライベートの度合いが高まっていくが、動線は内部と外部に2種類用意されており全体として回遊性を持っている。そのため必ずしもパブリックからプライベートへの階段を経るのではなく直接それぞれの領域にアクセスすることが可能である。



高橋 宏精・千田 正浩  
工学院大学 大学院 建築学

## 「ヴァハハウス Bufferhouse」

### Concept

「環境」がテーマの今回のコンペでまず考えたのは、「つながり」という最小単位の「環境」でした。この「Bufferhouse」は、家族一人ひとりの好きなものが共有のスペースにあふれてくる家です。個人は家中の棚に自分のものを置き、家族はそれをみながら楽しんだり、散らかしきすぎだと注意したり、一緒に遊んだりできます。物を置いて区切ったり、取り除いて風を通したりしながら、また家族のスペースとのバランスをとりながら、家のなかの「つながり=環境」をつくることができます。

「Bufferhouse」は自分で、家族、身近なところから「環境」を考えることのできる家になります。

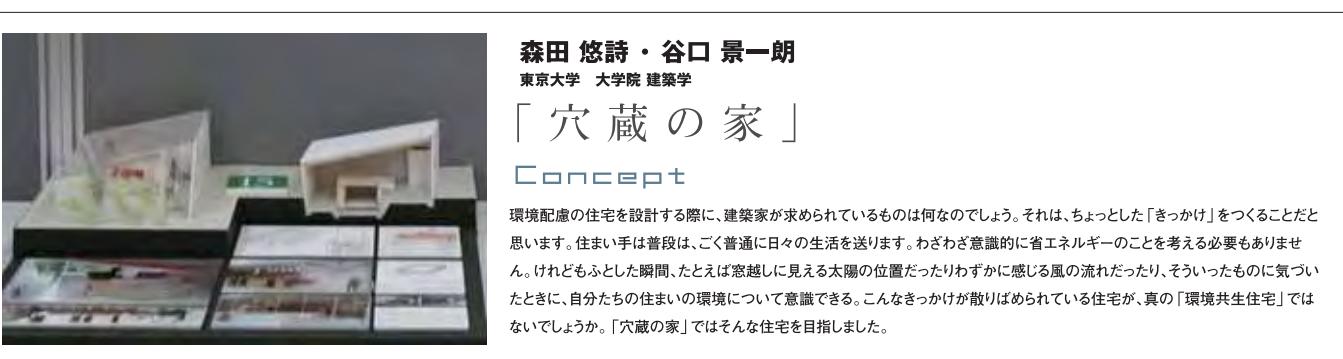


松岡 伸明  
日本大学 大学院 建築学

## 「ニワをつかむ家」

### Concept

環境というテーマから、その土地、気候風土に根付いたバナキュラーな素材を用いて、その土地の環境どうまく馴染むような新潟県産である越後杉を木材に使用する。外部にさらされる部分が多い外側の壁面には、庭の木との調和を図るとともに、調湿性、防火性、防虫性、防腐性、不燃性が高い越後杉の焼杉を使用する。また、個室を囲む内側の壁面では、インテリアを明るく見せるとともに調湿性、防火性、蓄熱性に優れた漆喰壁とする。屋根材は耐久性が高く、リサイクル可能なガルバリウム鋼板とする。以上のように、なるべく自然素材を用い、その性質を活かしながら安心して生活できるような素材を提案する。



森田 悠詩・谷口 景一朗  
東京大学 大学院 建築学

## 「穴蔵の家」

### Concept

環境配慮の住宅を設計する際に、建築家が求められているものは何なのでしょう。それは、ちょっとした「きっかけ」をつくることだと思います。住まい手は普段は、ごく普通に日々の生活を送ります。わざわざ意識的に省エネルギーのことを考える必要もありません。けれどもふとした瞬間、たとえば窓越しに見える太陽の位置だったりわずかに感じる風の流れだったり、そういうものに気づいたときに、自分たちの住まいの環境について意識できる。こんなきっかけが散りばめられている住宅が、眞の「環境共生住宅」ではないでしょうか。「穴蔵の家」ではそんな住宅を目指しました。



高井 利洋・大久津 龍輝・北澤 謙  
東京工業大学 大学院 人間環境システム

## 「アツマドの家」

### Concept

マドの役割「住宅」と「環境」を考えるとき、住宅内部と外部がどのような関係にあるのかということになります。マドを開け放つことで外気を取り込む「通風・換気」、自然の光を取り込む「採光」、周囲の風景を取り込む「眺望」の役割も果たすなど、外部環境を取り込むことで関係を取り持つ重要な要素です。例えば、全面ガラス張りで開放的な住宅と、壁で閉ざされた閉鎖的な住宅とでは周囲との関係は異なるように、マドの形・大きさ・位置は、そこに住む人の生活、外部環境とのつながり方を大きく変化させます。私たちは環境と住宅の接続部であるマドの役割を最大限に引き出すことで、環境と共に生ずる住宅を考えました。

# 2008 住宅設計コンペ residential design competition

## wining prize theme「環境」 入賞

Japan Architectural Consortium of Students



**石橋 慶久・平井 雅**

京都工芸織維大学 大学院 工芸科学研究科 建築設計学専攻(石橋)

京都大学 大学院 建築学科 建築学専攻(平井)

### 「家族写真の家」

#### Concept

ヘビのように折れ曲がり伸びる空間をつなぐ大きなマド。部屋は溶けあってひとつになる。2つの部屋は互いに溶けあう。たくさんの部屋もそれぞれ溶けあってひとつになる。家とは、家族を取り巻く環境です。違う部屋にいても、互いに見守り合う環境、互いの間に入るのではなく、壁ではなく床です。マドの向こうはいつも、日々の生活を営む家族の姿があります。プライベートを過ごす時も、家族の声が聞こえる、姿が見える、そんな時間が流れます。



**大塚 隆光**

日本大学 大学院 生産工学研究科 建築工学専攻

### 「半透明なイエ」

#### Concept

「半透明なイエ」は機械に極力頼らず、自然の力によって外部空間、内部空間共に夏涼しく、冬暖かい気持ちの良い住空間を作り出し、新しい環境共生住宅の提案である。このイエには、緑を一種の空間の仕上げ材として考える手法を取り入れた。様々な通風の取り方ができるプランを考え、風を通し高温多湿の部分をカバーする事を考えた。ルーバーの壁と縁に囲われた外部空間を通して、間仕切りのほとんどない内部空間に、優しく軽らかい風が内部空間を通り抜けるようプランを構成した。



**中榮 康二・土居 勇毅**

立命館大学 大学院 創造理工学専攻

### 「塔と平屋の家」

#### Concept

それぞれの部屋がある塔は天井が高く、外のいろんな風景が見える。そして、4つの窓から、いろんな光が入ってくる。リビング・ダイニングのある平屋は天井が低く、堀で囲まれてながら開放的である。そして、平屋は庭を介してやわらかい反射光が入ってくる。この二つの環境のギャップが質として生まれてくることが豊かなことだと思う。いろんな環境をひどりがりがいろんな感じ方をすることで、自然と密接な建築になって、そこから地球環境に思いをはせるような建築になればいいと思う。



**長谷川 千夏・田村 大地**

東京工業大学 理工学研究科 建築学専攻

### 「サンドイッチハウス」

#### Concept

すべての個室が庭と直接関わりを持ちます。家族としての一体感と個人の独立性を同時に重んじることは、現代の生活スタイルに求められる住まいではないかと考えました。壁による分割と挟まれた庭という明快な構成は住宅と環境の関係を考える上で新しい切り口になると思います。



**岩本 恵子**

芝浦工業大学 工学研究科 建設工学専攻

### 「3 ROOF」

#### Concept

個室にいる時、個室から出たときの状態を考えた。人によって、何をプライベートしたいのかは異なる。例えば、勉強机はもっと開放的で広々とした場所の方が良いといふ人もいれば、静かで落ち着いた場所の方が良いといふ人もいる。また気持ちや年齢によっても、その状態は変化していくだろう。そこで、ちょうど洞窟のような孔が家にあれば良いのではないかと考えた。



**小笠原 正樹**

早稲田大学 建築学科 古谷研究室

### 「人とともに成長する家」

#### Concept

自然エネルギーを有効に使い、心地よい四季を引き込んだ自然の流れに沿った生活のできる住宅。大量生産、大量消費を続けてきた今までのハイテンポなライフスタイルから、ワントンボ速度を緩めた生活を促し、時間・人ともに育つ生活の器をつくることが肝心だと考えます。フレキシビリティーのある平面・断面計画は、その日の天候、気温、住み手の気分に合わせて生活の場を提供し、静かに生活の様々なシーンを包み込みます。



**伊藤 雄一・太田 望・梁井 理恵**

首都大学東京 大学院 都市環境科学研究科 建築学専攻

### 「大きな小窓で -by the big small window-」

#### Concept

「省エネ性だけではない、新しい価値」この建物は、天井高が充分に取れた大きなリビングを、子供の部屋や、台所などの大小様々な部屋が囲っている構成を照らしています。人の集まる大きなリビングは、いろいろな高さに設けた大きな小窓に囲われており、そこから差し込む柔らかい光は、外からの距離がありながらも、まるで森の中の木漏れ日を浴びているような心地よさを感じさせます。



**佐藤 弓衣・伊藤 祥代**

京都工芸織維大学 大学院 工芸科学研究科 建築設計学専攻

### 「エンガワ+300」

#### Concept

日々感じる地球の変化は微小で、私たちが気づく時には、個人の問題としてではなく、国家であるとか、大きな規模になってしまっているのが現状である。難しい環境問題を考えるより、自分の身近な草花、また風土、展示を生活中で感じることが出来たら、地球が抱えてる問題も心配が持てるのではないかと考える。家族が育っていく過程の中で、移り変わり行く周囲の環境が感じることが出来る住宅を設計する。



**広田 彰紀・森 喜彦**

内山 崇・大畠 典子

東京理科大学 工学研究科 建築学専攻(広田・森・内山)

東京理科大学 工学部 第一部建築学科(大畠)

### 「紫陽花の家」

#### Concept

環境によって色が変わる紫陽花のように、子供の成長に合わせて姿を変えることのできる家…その花言葉は「成長」。この花言葉のように木のぬくもりに包まれ、子供の成長に合わせて変化できるように設計することで、家族みんなが家を大切にするという心が持てる家となり、この家を好きになってもらえると思っています。また、家全体に使わない場所が発生しないという「住むエコ」が生まれ、省エネや家の寿命も延ばすことにも繋がると考えています。



**香月 歩・似鳥 俊平・丸子 勇人**

東京工業大学 建築学科

### 「ひろがる棲家」

#### Concept

新潟は冬の寒さはもちろんのこと夏の高温多湿な気候もあり、一年での寒暖の差がはっきりしていることが特徴である。寒暖の温度差という環境が生活中で最大限に利用できるような設計を考えた。提案するのは、南北方向に広がる大きなワンルームを中心とした空気と共に暮らす住宅である。ここに棲む家族がこの住宅で起こる自然現象を肌で感じながら環境を理解し、共生していく棲家になることを期待している。



**永井 大輔・由谷 昂大**

首都大学東京 都市環境学部 建築都市コース

### 「CITY UNDER THE ROOF」

#### Concept

伝統的な自然素材と最新の材料のハイブリッドとし、シンプルな形態を用いつつ新しい空間を構想することによって、省エネルギーで長寿命、ローコストで快適な住宅が豊かな生活とともに実現することを考えています。建物は建てるだけで環境に負荷を与えます。そこに住むことでさらにその負荷は大きくなります。意識せずして省エネルギーで環境と共生する生活が実現されれば、人間的な喜びや楽しみを享受する機会をより多く得ることが出来るのではないかと想定しています。



**岩井 徹郎**

東海大学 大学院 工学研究科 建築学専攻

### 「境界空間」

#### Concept

「環境」という言葉には「観測点を中心にその周囲をとりまくもの」という意味をもつ。内と外の空間を繋ぐ、あるいは仕切る「境界」に着目し、それを建築化した「境界空間」の視点から「環境」をとらえ、住宅を計画した。「自と他」「内と外」「街と自然」といった一般的な環境関係の中で、住宅に関わるキーワードとして「熱環境」、「採光環境」、「交流環境」の3つをまとめて対象敷地でどうあるべきかを解いた。



**橋本 光祐**

日本工芸大学 大学院 建築学専攻

### 「傘を差す家」

#### Concept

この建物は人間が傘を差す姿をヒントにして造形したのではない。屋根面は熱を受けるので通気層を設けるが、この通気層に着目して住居環境の快適さと「家型」モデルのデザインを変化できないかと考えた。一般的に通気層は風を取り入れて、熱を排出するという概念があるだろうが、この空間を人間が入れるスケールまで大きくした。そのことで、屋根に受ける熱を逃がすとともに、人間にとて半外部の空間ができる。このようにしてできた形は家が傘を差すようである。



**坂田 旭**

東海大学 工学研究科 建築学専攻

### 「小さくて大きな家」

#### Concept

この「小さくて大きな家」は、外部空間を積極的に生活空間として利用していくことを考え「かたちのないかたち」を持つ建築として提案したものである。ここでいう「かたち」とは、建築のボーダーであると考え、それを緩めにしていくことで、何処からが内で何処からが外なのか認識しづらい、都市空間が建築の内部空間に、または建築の内部空間が都市空間に同化していくような提案をしたいと考えている。



**井村 英之**

東海大学 大学院 工学研究科 建築学専攻

### 「『余白』の住宅」

#### Concept

一都市・自然・生活に「余白」を取り込む——本計画は新潟の間伐材を用いた集成材などを積極的に取り入れています。新潟の森林は45年ほど経過した杉人工林が多く、今後、間伐などが必要となるため、地元の間伐材を使用することで輸送エネルギー量の削減だけではなく、林業の活性化へと繋がります。住宅だけで自己完結するのではなく、森林が豊富な新潟らしい循環型の住宅建設を考えていくことで、住宅から地球規模の省エネルギーを考えいくことができるでしょう。



**佐藤 桂**

前橋工科大学 建築学科

### 「フィルターを透る家」

#### Concept

その場所で感じる空気感、湿度、におい、住民の雰囲気などすべての要素が「環境」である。新しい土地に住まうには、周辺からもたらされる存在を取り込むことが条件になります。環境を取り込み、しばらくするとそれは馴染み、やがてこの家から積極的に影響を与える存在に変わるものだ。



**祖父江 一宏・辻 琢磨**

横浜国立大学 大学院 建築都市スクール Y-GSA

### 「風景のカケラを拾い集めたら」

#### Concept

人は「環境」の中で暮らしている。地球という環境。家の周りの環境、家の中の環境、部屋の中の環境。ニュータウンにおける環境とは、南面に配された庭や、堀によってその領域が示された隙間でしかなく、これらの環境は生活と密接に関係しているとは言えない。豊かな生活のためにあるというより、一般的な最低限の「生活」を確保するためだけにある。



**安土 正朗・横木 真**

横浜国立大学 大学院 工学府 建設学科 社会空間システム学

### 「12の環境」

#### Concept

環境負荷をなるべく小さくすることを目的とした ecology としての環境と、周辺もしくは、自らが内包する environment としての環境を、建築のデザインで結びつける。おののおのの個室が小さな外部空間をもち、外の環境と室内空間のアプローチを一つのビースとしてとらえ、そのビースの集合として住宅をとらえようというものである。これにより、町家の坪庭がいくつもあるような、さまざまな小さな環境(environment)を内包した住宅となる。



**島田 宇啓・青木 健**

横浜国立大学 大学院 工学府 社会空間システム学

### 「縁側のあるイエ」

#### Concept

環境とはそこに住む人の生活や家の前の通り、そして近所さん達との関係をより豊かににする、空気のよな、そんなものではないかと考えます。この家のキッチンやリビング、ベッドルーム、子供部屋、そしてお風呂がそんな環境をつくり出す二つを組み込むような構成になっています。そしてお風呂には開口通り抜け、通りを通る人が楽しむ風景を

# 2008 residential design competition 住宅設計コンペ theme「環境」

## 環境に配慮した36の作品に圧巻。

### 講評



吉田 研介(神奈川)

吉田研介建築設計室

600案以上出るという、数も嬉しいが、レベルも非常に高かったことも、主催者ともども嬉しいことであった。昨年の第一回の一等案が実際に案のとおりに建設されたことが、応募する学生にとっても励みになり期待されたのだろう。今年も必ず建てるというから、楽しみであります緊張もする。

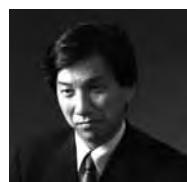
さて、今回の「環境」というテーマは昨年同様、言ってみれば的が広すぎて絞るのに苦労する案であった。大きく捉えれば地球的規模も考えられるし、小さければ向こう三軒両隣、敷地の周囲という捉え方もある。従って、私は、その「解」に正誤、優劣はあまりつけなかった。が、自分の絞った「環境」とどう関わるか、設計の姿勢をどう関わらせるかという点は、シビアに見ようとした。しかしやはり建築は実体、つまりモノである。言ってることややろうとしたことは興味があつても、結果としてできたものがお粗末では駄目だ。だから総合的に「この建築は良いか」という見方になるものである。「環境」そのものを論じる場ではないと考えて審査した。



平倉 直子(東京)

平倉直子建設設計事務所

建築を志す学生と住宅の「未来の可能性」を開くべく企画されたこのコンペは600件もの応募作品を集め、今や学生の注目度no1といえるでしょう。優秀賞には賞金や海外旅行に加えて応募案の住宅を建てるなど魅力満載です。2次選考の模型が展示される会場には学生も招待され熱気に包まれました。上位作品にしづらところまでは順調に進みました。優秀賞の選定では票が分かれ難い審査となりました。完成度の高い案、新しいライフスタイルや家族像を予感させる案、環境への思いを積み重ねた案などを退け、少々冒険心にとんだダイナミックに空間構成した案が最後に選ばれました。学生による提案なので、これから家族像や斬新な住空間への思考錯誤がみられる案を未完であつても推薦しましたが力及ばずの結果となりました。受賞式の後でコンペの主宰者より来年の実施に向けての抱負を伺い、更なる躍進が約束されましたことは、多くの熱意ある学生の応募があつての賜物と思います。主催者と応募者双方の働きかけがうまくかみ合って、益々発展していくことを楽しみしております。



高砂 正弘(大阪)

高砂建築事務所

—コンペの愉しみ— 昨年の2倍以上の600点を越える応募があったことは事前に知られていたので、その心づもりをして一次審査に臨みました。それでも、会場に整然と並べられた作品の数と内容に圧倒されました。最優秀案が実際に建設される学生コンペが少ないことと、関係者の熱意と努力がこれだけ多くの作品を集めたのだと思います。一次審査を終えたところで応募作品を概観すると、コンセプトと形とで幾つかのパターンに分かれます。その多くは最近の雑誌からの引用です。それぞれのパターンの中から、おしゃべりで、声が大きく、聞き取りやすい作品が代表として残ります。次に、それらのパターンには属さない作品があります。これらは個々に内容を読み、採否の判断をすることになります。一次審査は30作ぐらいの代表を決める選考会なので、ひとつのパターンに多くの作品が重なると、必然的にハードルが高くなります。このあたりの駆け引きがコンペの愉しみかもしれません。気になったことがあります。それは、新潟という場所性と、環境というテーマに真正面から取り組んだ作品が少なかったことです。敷地や家族構成などが曖昧だったことが矛先を鈍くさせたのかもしれません。時流に流されない、この場所に相応しい案も見たかった気がしています。

### Time schedule

応募告知	平成20年(2008年)3月21日(土)
応募締切	平成20年(2008年)5月10日(土)
1次審査	平成20年(2008年)5月17日(土)・18日(日)
2次応募締切	平成20年(2008年)8月20日(水) 必着
2次審査	平成20年(2008年)8月23日(土) 一般公開審査

### prize

下記賞品を受賞された方に差し上げます。

- 最優秀賞(1点) ..... 最優秀賞者設計の住宅建設  
※実施設計・施工管理及び、諸官庁の手続きは当社設計部が行います。  
賞金100万円 + ヨーロッパ研修旅行
- 優秀賞(10点) ..... 賞金 5万円
- 協賛者賞(1点) ..... 賞金 10万円
- 入選 ..... 商品券 1万円

### examiner

審査委員：(株)吉田設計室 吉田研介、平倉直子建築設計事務所 平倉直子、(株)高砂建築事務所 高砂正弘  
一般審査員(2次審査のみ)：一般審査員とは2次審査会場に来場する社会人を示す

### 審査風景



審査会場には、一次通過者全員が集合。審査発表後には、審査員の建築家より、個別に作品の講評を得られる時間もあり、学生の方たちは、先生方の話を真剣に聞き、自分の課題点、評価点を改めて実感させてもらいました。